
聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎

DEADPOOL ZERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎

【Nコード】

N4720S

【作者名】

DEADPOOL ZERO

【あらすじ】

聖なる炎…ホーリーフレイム。

それを守る者達、炎術師。

炎術師を目指す者達がいる学園に今、かつて「真紅の不死鳥」と恐れられた一人の心優しき少年がやって来た。

しかしその学園は「蒼炎の龍帝王」と呼ばれるかつての自分に似た心冷たき少年とその妹に支配されているのであった…

大罪を犯した少年と妹を守るためだけに生きる少年が会合時、何が起こる！

基本設定（前書き）

まず、基本的な設定を書きました。

基本設定

主人公設定

名前 炎堂烈火（えんどう れつか）

身長 175センチ

体重 74キロ

好きな物や人 ドーナツ、カレー、鳥

嫌いな物や人 戦闘、身分が上な人

趣味 バードウォッチング

炎の色 真紅

炎術師ランク 炎熱

武器 両刃剣（バーニングブレイブ）

異名 「真紅の不死鳥」

主人公の一人。性格は生真面目で素直、そして優しい鳥好きな16歳。

過去のある事件によって戦闘と人を傷つけるが嫌になり、絶対に殺す事がない「無傷刀剣流」という剣術を身に付ける。

必殺技は空高く飛び、剣と己に炎を纏って高速回転しながら敵を貫く、「フェニックスマグナエグゼーション」。ランクが炎熱でありながら至る所に炎装が可能で、両腕両足に鳥のような爪が生えた手足を、背中に不死鳥を模した翼と尾が現れる。

名前 蒼炎寺冷司（そうえんじ れいじ）

身長 179センチ

体重 72キロ

好きな物や人 妹の凍華、凍華が作る食べ物やデザート、青い薔薇、ラーメン

嫌いな物や人 自分の立場を分かってない奴、凍華に害なす物や人

全て

趣味 凍華と青薔薇を育てる事

炎の色 蒼（青より濃い青）

炎術師ランク 焰

武器 双刀（神龍帝王）

異名 「蒼炎の龍帝王」

もう一人の主人公。代々炎術師の家系でとても有名な蒼炎寺家の七代目当主で17歳。頭脳明晰、スポーツ万能でほとんどの事が出来るため物事全部に冷めている。

そのため性格は常に沈着冷静、必要な事以外は言わないが唯一妹の凍華の前ではいつもと違う表情を見せる。（極度のシスコンのため妹の事になると性格が変わる）

ランクが最高位の焰であるために戦闘能力はとてつもないくらい高く、圧倒的な手数と力で一気に敵に反撃や防御を許さず倒しその姿が龍に見える「龍牙斬刀流」の使い手である。

必殺技は龍牙斬刀流の奥義を全てたたき込む、「蒼炎龍舞斬」と二撃必殺の、「天翔真龍斬」。ランクが焰なため炎装は軽く出来、さらに炎鎧装まで出来る。炎装時は龍を模した翼と尾、腕と足のような炎を纏い、炎鎧装時は蒼い龍のような姿となる。

仲間設定

名前 林田翔 （はやしだ しょう）

年齢 16歳

身長 173センチ

体重 69キロ

好きな物や人 ソバ、緑茶、自然

嫌いな物や人 汚染や破壊

趣味 自然観察

炎の色 緑

炎術師ランク 爆炎

武器 斧（リーファックス）

異名 「森林の守護者」

主人公二人の親友で常に笑顔で何事も諦めない性格の17歳。怪力の持ち主でどんなに重い物でも軽々と運べ、自然が大好きで汚したりする者は許さない。

必殺技は空中から炎を纏った斧で相手を切り裂く、「ギガンドスマッシャー」。炎装は可能なため、グリフォンを模した炎の手足と翼を両腕両足背中に纏って戦う。

名前 蒼炎寺凍華（そうえんじ とうか）

年齢 15歳

身長 162センチ

体重 42キロ

好きな物や人 兄様、青い薔薇

嫌いな物や人 赤い炎

炎の色 水色

炎術師ランク 焰

武器 ハルバード（龍王妃）

異名 「青薔薇の人魚姫」

冷司の双子の妹で優劣や地位など関係無く誰にでも優しく接し、色々皆に役立つ事をする性格。戦闘力も兄に負けなくらい高く、スピードと治癒力と水泳能力は兄より高い。

いつも兄の近くにいるため、普通に彼と会話出来るのは翔を除くと彼女だけである。家の中にある、青薔薇の園という所で青薔薇を育てている。（ちなみに彼女も相当なブラコンである）

必殺技は薙刀から青い炎を一気に放って敵を燃やす、「妃龍蒼炎破」（色々なバリエーションがある）と空中を泳ぎながら青い炎の巨大

な波を起こす、「蒼炎乃荒波」。

炎装状態は上半身が至る所に青い炎で出来た薔薇が咲いたドレスで下が人魚のような尾びれ。背中にも魚のひれのような水色の炎を纏っているため空中を自在に泳ぐことが出来る。

ちなみに烈火は保健委員でバードウォッチング部、冷司は生徒会会長で刀剣術部、翔はボランティア委員で山岳部、凍華は生徒会副会長で華道部に所属している。

世界・用語設定

聖炎帝国…優太達がいる国で、日本の沖縄に似てる。違う所といえば、国の中心に巨大遺跡がありそこから出るオーラで守れている事と、天氣がオーラの消えている時以外、晴れしかない事である。

聖なる炎…ホーリーフレイムとも呼ばれる国の象徴。人々の心に炎を灯し、不思議な力を与えた。国の中心にある遺跡の中からオーラを出し、守っている。さらにほとんどの物が聖なる炎のエネルギーで動いているためこれを狙う物が多数存在していたが、炎術師によって退けられ、今も選ばれしプロの炎術師達に守られている。

炎術師…聖なる炎が灯した炎の力を操り、聖なる炎を悪しき者達から守る者達の総称。心の炎の強さや大きさでランクが決められており、下から火↓烈火↓豪火↓炎↓炎熱↓爆炎↓焰の順である。ちなみに炎装は例外を除き、爆炎と焰のランクでなければ出来ない。

炎装…心の炎を自らのイメージした生物などを模した鎧として纏う事。炎術師ランクが爆炎か焰でなければ例外を除いてほぼ不可能である。逆に焰ならば出来ないと炎術師として失格な程重要である。そして、心にイメージした生物のようなさらに強い炎の鎧を纏う炎鎧装がある。

獄炎…聖なる炎を狙う悪しき者達の総称。帝国外から来てると思われ
るが、詳しい事は不明。特徴として全員が黒い炎の鎧を纏い、黒
い剣や槍を持っているらしい。

基本設定（後書き）

感想をお待ちしております。

やって来た真紅の少年（前書き）

うまく書けたか不安です。

やって来た真紅の少年

とある国には、不思議な物があつた。それはとても温かく、そして優しい光を放つ炎であつた。人々はその炎と共に進化していった。しかし、時に一部の悪しき者達はその炎の一部の力を使って炎その物を奪おうとしていた。だが心正しく者達はそれを阻止するため、また炎の一部の力を使い長い戦いの末悪しき者達を振り払う事に成功した。その時、炎を守り通した者達は後に纏めてこう呼ばれるようになった、炎術師と……

これは炎術師を目指す者達の心に炎を灯していく物語である！

〔蒼炎寺家屋敷〕

ここは炎術師の中で有名な一族達の中でもさらに有名な蒼炎寺家の者が住む屋敷である。その庭で木刀を振っている青い道着のような物を着た一人の少年がいる。彼は蒼炎寺家七代目当主、蒼炎寺冷司。蒼炎寺の中でも天才と呼ばれる彼はその青く冷たいその瞳と同じ色の髪が特徴である。そんな時、後ろから彼と同じ髪の色ของ ロングヘアーに同じ色の瞳を持つ女の子が両手に朝ご飯を持って来ていた。

「お兄様、朝ご飯の時間です。」

「そうか。今日は何かな？」

「親子丼です。」

「凍華のご飯は美味しいからな。冷めない内に食べようか。」

「はい。」

彼女は蒼炎寺凍華、冷司の実の妹で唯一の家族である。

「いただきます。」

居間に移動した二人は隣同士で一緒に親子丼を食べ始める。食べていると、凍華が話掛けて来る。

「そういえば、今日は転校生が来る日ですね。」

「そうか。まあ、どんな奴かは見てみないと分からないな。」

いつの間にか完食した二人はそれぞれ制服に着替え、己の得物を鞆と一緒に持つ。二人はこう見えて、炎術師の候補であり専門の学校に通っていた。

「それじゃあ行こうか？」

「はい。」

二人は常に一緒である。そのせいで恋人同士に間違えられる事もあるが気にしない。そして二人は家から青い車体に水色の炎のマークがペイントされたバイクに乗って出発した。

「数十分後 神火第一高等学園」

この学園は炎術師を目指す少年少女達を通う、この国最大最高の学園。この近くに住む者達の中で遠い所からでも約30分で着く距離でありながらこの学園には約1000人以上の生徒達がいるのだ。

しかし、そんな彼らでも必ず止まるほど有名な者がいた。

そう、先ほどの学園に到着した蒼炎寺兄妹である。彼らの家柄が有名なもあるが、二人の人気の高さ

も相まって有名であった。

『凍華姫〜！写真を一枚！』

「はい。いいですよ。」

『キャア〜！冷司様〜！こっち向いて〜！』

「……………」

凍華はその平等に接する優しさで、冷司はクールなかつこよさで、そして二人は文武両道な実力とそのルックスで学園の有名人物となっていた。そして二人が校門に入ろうとしたその時だった。

「…待て。」

「どうしたんです？お兄様？」

「…あれを見る。」

と指を差した所には一人の少年が後ろ姿で立っていた。それが冷司は気に入らないのか、愛刀「神龍帝王」を構える。

「…おい、お前。」

「ん？何でしょうか？」

その少年は目も髪も真紅で、腰に両刃剣を差していた。

「…一応忠告だ。俺達より先に入るな。いいな？」

蒼炎寺家を知っている者なら普通は、すぐ従うのだが…

「どうして？別に関係無いでしょう？」

その少年は反論した。その直後、彼の寸前で刀が止まる。もちろん冷司の刀だ。

「…今度、反論したらお前はやられるぞ？」

そのまま彼は学園に入っていく。

「お兄様には逆らわない方がいいですよ？」

凍華も兄に続いて入っていく。そして他の生徒も入っていく。その少年は誰もいなくなってから呟いた。

「次に心に炎を灯すのはあの人ですね。」

彼もまた入っていった。

（教室）

冷司と凍華がいる1-Eは朝のHRが始まっていて、先生がこう告げた。

「知っていると思うが今日から転校生がここに入る。お前、入ってこい。」

そして入って来た人物を見てクラス全員が驚いた。

「炎堂烈火です。よろしく願います！」

それは朝、冷司に初めて反論した真紅の少年であつたからだった…
今、運命の齒車が動き出した。

やって来た真紅の少年（後書き）

感想をお待ちしております。

優しさと恐怖〜前編〜（前書き）

少し戦闘が入ります。結構短いです。

優しさと恐怖〜前編〜

「炎堂烈火です！年齢は16、ランクは炎熱で色は真紅です。まだ分からない事ばかりですがよろしくお願いします！」

という簡単自己紹介の後、普通に授業が始まった。そして最初の授業が終わり、烈火は生徒達（主に女子）から質問攻めに遭っていた。

「ねえ、烈火君はどこから来たの？」

「遠い所からって事にしておいてください。」

「好きな事とかある？」

「バードウォッチングですね。」

「なんか入るの？」

「バードウォッチング部と保健委員会ですね。」

とそんな時である。

「皆さんそろそろ模擬戦の時間ですよ。」

と冷司の妹、凍華が全員に呼びかける。それにみんな答えていくが烈火は少しうつむき

「そうですか………」

と答え、その模擬戦を行う場所へ向かった。

（体育館）

全員が集合し、担当の先生が説明する。（担任の木原 秋美先生が担当している）

「いいか、お前達。これから行うのは模擬戦といっても実戦に近いから気をつける。ルールは簡単だ、いくらでも時間をかけていいから相手を倒せ。そしてやる時の人数だが一対一でも、一対多人数でも構わん。立派な炎術師になりたければいくらでも戦え。以上だ。」

そしてそれぞれが戦う準備をしている時、秋美は何もしない烈火を見つける。

「どうした烈火？戦わないのか？」

「いえ、そういうわけじゃありませんが誰とやればいいか分からなくて……」

するとちょうど冷司の姿が秋美の眼に止まる。

「そうだな。冷司とやったらどうだ？」

「あつ、あのすごく自己中人ですか？」

聞こえたのか、冷司が物凄いスピードで近くに来る。

「……貴様、今俺をバカにしたか？」

「いえ、注意です。嫌われますよ？自己中過ぎる人は。」

「……邪魔なんだよ、俺の事を好きにならない奴と思い通りにならない物は全て！」

いつの間にか冷司は刀を抜いて、振り下ろす。

「ハッ！」

それに烈火は剣をぶつけ、鏝競り合う。そのまま何度も斬り合っていく。

「イライラするんだよ…お前みたいなのがいると。」

正確な斬撃を連続で放ち、烈火を窮地に追い込む冷司。

「あなたの心は冷た過ぎる！」

それを何とかかわす烈火。

「見せてやる。龍牙斬刀流の奥義を…」

「さあ、心に炎を灯していこうか！」

ついに二人の戦いの火蓋が切って落とされた。

優しさと恐怖〜前編〜（後書き）

感想をお待ちしております。

優しさと恐怖〜後編〜（前書き）

サブタイトルは主人公二人を表した物です。

優しさと恐怖〜後編〜

戦い始めた二人、互いに睨み合ったまま動かない。周りの生徒達もその二人の雰囲気によって動けなかった。

「お兄様に挑むなんて、バカな人。」

凍華のその言葉と共に動き出す二人。再び鏢競り合いに持ち込み、そこから一端離れる。まずは冷司が動き、何百、何千と高速で刃を振るう。

（なんてスピードと正確さだ。一太刀でも当たれば負ける！）

と烈火は考えながら、剣も使ってかわし、跳ね返す。

（この防御を基本とする構え、無傷刀剣流か…）

冷司は冷静に分析し、一端離れる。

「いい加減、その刀しまってくださいよ。こんな戦い、何にもなりませんよ？」

と烈火は言うが…

「…俺に指図や質問をするな。していいのは凍華だけだ。」

冷司は全く聞こうとしない。

「分かりました。ならば！」

烈火は右腕に鳳凰の翼のような炎を纏わせ、高く飛ぶ。

「フェニックスナックル！」

そしてそのまま急降下し、強烈なパンチを放った。その威力は凄まじく、大爆発が起きる。

「お兄様……」

凍華は心配したが、煙が晴れるとそこには青い炎によって守れている冷司がいた。

「……ここまで、俺の近くに來た奴はお前が初めてだ。」

しかし、冷司は居合いのような構えをする。

「だが、無意味だ。そして貴様は……俺という史上で最強で全において頂点に立つ男に完膚無きまでに倒される運命なんだよ。」

そしてそこから放たれたのは目にも見えない光速の居合いの連続だった。

（こ、これは龍牙斬刀流！相手に攻撃も反撃も許さない龍のごとく恐ろしい剣術の一つ！）

（そう……お兄様が極めた最強で最高の剣術。見た者は必ず倒される運命なんです。）

烈火と凍華がそれぞれ心の中で考えたその時、模擬戦は冷司の一方

的な戦いへ変わった。

「これが俺の実力だ。本気では無いがな。」

烈火には見えていた。何故が見えた。しかしかわせない、いやかわそうと出来ないのだ。

（り、龍だ！彼の後ろに龍が見える！その龍が僕を睨んで動けなくしてるんだ！ぐ、ぐわああああ！）

烈火が気付いた時にはその全ての斬撃を受けていた。

「……龍牙斬刀流、二の斬。……龍神一閃。」

冷司が刀を納め、技の名前を呟くのと同時に烈火は倒れた。

「な、何て力だ……」

何とか烈火は立ち上がるが、全身が斬り傷だらけ。もうふらふらであつた。

「……次で終わりだ。」

今度は突きのような構えになり、しかも刀に青い炎が灯っていた。

「あ、青い炎……まさか！」

烈火がその炎に一瞬見惚れた次の瞬間、彼の体は貫かれた。

「……五の斬。……昇龍突。」

冷司はさらに連続で突きを放った。

「…………一の斬。…………龍牙絶刀。」

連続で三つの技をくらい、ついに烈火は地に伏した。しかし…………

「…………僕はまだ、倒れる訳にはいかないんだ！」

「…………何！」

次の瞬間、烈火の背中から真紅の鳳凰のような翼が現れ冷司を吹き飛ばした。

「フェニックスウイング！」

その衝撃によって冷司は炎に包まれるが…………

「…………少しは出来るな。」

中から無傷で冷司が出てくる。そしてそこで授業の終わりを告げる鐘が鳴った。

「…………模擬戦のつもりだったが、とんだ番狂わせになってしまった。よって、今回の授業でやる予定の物は次の機会だ。」

と秋美先生が告げ、見とれてばかりだった生徒達はハツとなったように気づきそろそろと体育館から出って行った。

「…………勝手に俺や凍華の事をバカにしたら殺すからな。…………

覚えておけ。」

と先ほどの戦いのダメージによってまだ動けない烈火に対し、冷司はそう言い放ち凍華と一緒に体育館を出て行った。

「・・・・やっぱ僕は、まだ死ねない。」

と烈火は悲しい顔で呟いた。

優しさと恐怖〜後編〜（後書き）

感想をお待ちしております。

蒼炎龍の生きる理由（前書き）

今回は冷司と凍華が中心の話です。

蒼炎龍の生きる理由

（図書室）

この学園の図書室はとてつもなく大きい。世界中の本が集まっていると言っても過言ではない。そんな中、冷司は妹の凍華を連れながら立ち読みをしていた。

「・・・」

いつもなら凍華は冷司が立ち読みをしていると「座って読みましょう」等と注意するのだが今日はずっと黙っていた。そして凍華は冷司の制服の袖を指でつまんでいた。

「・・・あれを思い出していたのか？」

本を閉じ、凍華の方を見て問う冷司。それに対し、凍華は小さくうなずく。

「お兄様、私やっぱり怖いです。」

「無理も無い。あの転校生の炎の色と技に見えた生物は、俺達の大事な物を奪ったあの女と同じだったからな・・・」

震えている凍華を抱きしめる冷司。この兄妹の過去には何があったのか、それはこの二人にしか分からない。そんな時だった。

「仲良くしてる所悪いが、ちょっといいか？」

と言いながら、一人の生徒が図書室入ってきた。兄妹は離れるが気

にはいなかった。

「……翔か。何の用だ？」

オールバックの茶髪に緑のメッシュが数本と、さらに深い緑の瞳を持つ彼の名前は林田翔。ランクは爆炎で斧を使う緑色の炎を操る冷司の唯一の親友で、凍華の友達である。

「いや、さっき雷美が探してたぜ？お前の事。会長はどこですか？って。」

雷美というのは冷司が会長をしている神学生徒会に所属する生徒の一人で、会計をしている。

「……悪いが、今日は凍華の具合が悪いから帰ると伝えてくれ。」

「了解したよ。気をつけてな。」

「……分かっている。」

そして二人は別々の場所へと向かった。

〈学園広場〉

「ぐわあああああ！」

「ぎゃあああああああ！」

「ぬわあああああああ！」

黒い制服に身を包んでいた、生徒達が一つの影にどんどん倒されていく。その影は青い制服を着ているため、誰から見ても冷司だと分かる。

「……三の斬、龍牙億文刃。……お前らみたいな不良には消えてもらう。」

生徒会の仕事は二つ、学園の平和と生徒の安全を守る事と学園に蔓延る不良達のような存在の肅正である。
そして冷司は今、凄まじい数の斬撃を放ち不良集団「デビルファイヤーズ」のメンバーを斬滅していった。

「……続いて六の斬、双頭之龍。」

『ぎゃあああああああ！』

さらに愛用の刀「神龍帝王」を打ち手の部分で合体させ大きく振り回し、そのまま不良達を斬っていく。そしていつの間にか不良達は全員倒されていた。

「……たったこれだけとはな。」

冷司にとって、実際こんな不良達などどうでもいいのだが凍華に何かあつてはいけなかったためにこうして肅正しているのだ。

何故、冷司は凍華のためだけに動いているのか。その理由は簡単だ、凍華は自分をとつともなく信頼しているからそれに応えるためだけに、凍華は大切な妹だからずっと守り続けるために、凍華に迫る障害や危機を全て消すためにと理由を挙げれば全てに凍華が含まれている。そう、彼の行動原理を決めるのは自分と凍華の意思だけなの

である。

「お兄様、終わりましたか？」

「ああ、終わった。だから帰ろうか？」

「はい、勿論です。」

いつの間にか元気を取り戻し、様子を見ていた凍華が近づき二人は抱き合いながら会話する。そう、彼は凍華と二人きりの時だけ本当の性格を見せる。この性格は凍華だけの物だ、他の誰にも見せないというのが彼の精神が指示した答えなのだ。

「あれ？冷司さんに凍華さんじゃありませんか。」

一人の白い制服を着た生徒が目の前に現れた。とても長い虹色の太刀を背負って。

「……同じクラスの煌牙彩斗か。……何の用だ？……
というか人の妹を勝手に呼ぶな。」

「いえいえ、私があるのは凍華さんの方ですよ。」

「えっ？私ですか……。って！勝手に引っ張らないでください！」

そして凍華の手を握ってどこかへ行こうとしたその時だった。

「……凍華から離れる雑魚。」

冷司の神龍帝王が彩斗の腕を一閃するが、それを難なくかわす。

「残念ですが、そこら中に寝てる雑魚と一緒にしないでください。」

彩斗も己の武器である「輝彩滑刀」きさいかつとうという冷司の刀より長い、白い持ち手に金の鍔で虹色に輝いている刀身と鞘の太刀を抜き構えるがそこに冷司の姿が無かった。

「ど、どこに消えたのですか!？」

周りを見渡していると、彩斗を覆うように影が大きくなる。

「……ここだ、七色野郎。」

「そ、空を飛んでる!？」

そこには青い龍のような翼の炎で飛んでいる冷司がいた。それだけじゃない、彼は青い炎で出来た龍の腕、足、尾も纏っていた。

「人の妹に手を出そうとした時点で、貴様はもう死んでるんだよ!」

次の瞬間、青い炎を灯した巨大な刃が彩斗を太刀ごと両断した。それだけじゃない。さらに横へ一閃、斜めに一閃を繰り返す内に彩斗という人物は黒焦げの人のような物体へ変わってしまった。

「生きてるだけ、ましと思えよな。」

炎装を解除し、冷司は何事も無かったかのように帰って行った。だが、それを見てる人物が二人いた。何と、烈火と翔であった。

「あれがこの学園最強の男の強さですか?」

「そう。あいつの強さの秘密は凍華が存在している限りあのままさ。」

先程二人はこの広場で知り合い、今起きた戦いも見ていた。

「僕、頑張って彼の心に新しい光の炎を灯してみせます!」

「頑張りな。応援するからな?」

「ありがとうございます!」

二人は固い握手を交わした。

〈蒼炎寺家屋敷〉

とある一室、そこには大きなベッドがありその中で動いている者がいた。勿論、冷司と凍華である。二人は兄妹であるのにも関わらず激しく愛しあっていた。

「お兄様、今晚はいつも以上に激しかったです。」

「そうか。だがこうやって愛しあえるのは嬉しいだろ?」

「勿論です。お兄様以外とは結ばれたくありません。」

「ありがとう。さすが俺の妹だ。」

そう言つて二人はまた激しく愛しあうのであった。

く????く

「あれ？私^がずっと寝てたかな？」

金髪のセミロングの髪をなびかせ、鉄球の付いた杖を担いでいた少女がどこかで目を覚ました。

蒼炎龍の生きる理由（後書き）

感想をお待ちしております。

暴走への一歩（前書き）

今回で烈火と冷司のとある伏線（？）が出ます。

暴走への一歩

ある日の事、冷司と凍華は学園長直々に学園長室へと呼び出されていた。それを見かけた烈火はばれないように追いかけていた。

「もしかしたら、二人の秘密が分かるかもしれない。」

と小さく呟き、曲がり角などに隠れながら追いかけていくのだった。周りの生徒の視線や笑い声は気にしなかった。

〈学園長室〉

烈火が追いかけていることなど知らず、蒼炎寺兄妹は真剣な表情で静かに扉を開けて中へ入る。そしてまずは凍華がしゃべりだす。

「学園長……いえ、お母様。お呼びでしょうか？」

それに応えるように後ろを向いていた青い浴衣のような和服と深い青の髪が特徴の女性が兄妹の方を振り向く。

「良く来たのう。冷司、凍華、二人とも元気にしてたかの？」

「そりゃ、俺達兄妹はずっと元気さ。」

彼女の名は蒼炎寺海璃。そうえんじかいりこの学園の長を務め、二人の実の母親であるが彼女存在は普段極秘裏にされており、存在を知るのは実の子供の冷司と凍華だけである。

「それでお母様。どうして私達を呼んだのですか？まだ、青い薔薇は枯れてませんし……」

「うむ、二人・・・特に冷司に見てもらいたい物があつてのう。」

「俺に？」

そう言つて海璃が取り出したのは、黄金に輝く冷司の神龍帝王よりも長い二本の刀であつた。それを見た兄妹は驚きの表情を浮かべた。

「こ、これは・・・」

「刀ですけど・・・何だか、恐ろしいような・・・」

「うむ。凍華や他の生徒ならば恐怖を感じるじやろうが・・・冷司、そなたは別だと思ふの？」

と言われた冷司は黙つてうなずいた。そして刀に近づき、指を指しながら呟いた。

「ああ。この刀はまるで、俺を求めているかのように・・・そうだな、ずっと待っていたかのように見える！」

「そうじやろうな。この刀の名は聖魔龍神刀、せいまりゆうじんとう我が蒼炎寺家に代々伝わってきた史上最大最高の宝刀にして、妖刀じゃ。鞘には青い瞳を持つ龍の模様が刻まれ、刀は冷たい氷のような美しさを持つていての、かつての当主、我が夫であつた蒼炎寺辰巳そうえんじたつみや他の当主も魅了され扱おうとしたが逆に刀によって死の運命をたどらせてきての。何故か？それは、この刀に聖と魔の龍が一本に一体宿っているのじや」

「聖と魔の龍とは何ですか、お母様？」

凍華の質問に海璃は知っていたかのように答えた。

「まずは聖の龍じゃの。左手に持つ方の刀へ宿るこの龍は癒しと光の象徴。この龍の放つ光には敵の戦意を奪い、息吹は枯れた森や汚れた海を蘇らせ、傷ついた者を癒す。そして人以外の生物ならば簡単に息を吹き返す。」

「魔の龍はどういった感じなんだ？」

「その逆じゃ。右手に持つ方の刀へ宿るこの龍は破壊と闇の象徴。この龍から放たれる闇の波動と息吹は生きとし生きる全ての命を奪い、血や肉などを吸収し成長していく。そして認めない者は必ず呪い殺すと言われている。」

「そんな刀を俺に与えてどうするつもりなんだ？母さん。」

説明を聞き終えて冷司が質問すると、海璃は驚くべき事実を告げた。

「あの転校生。真紅の不死鳥かもしれぬ。」

「……………！」

「となればじゃ、我が一族は戦わねばなるまい。かつての因縁を今度こそ根絶やしにするためにの。」

それを聞いた冷司は怒り、憎しみを強く込めた表情で受け取る。すると二本の刀がさらに輝きを放つ。それに冷司はただ包まれていく。

「くっ！……………上等だ！仇を討てるならば、死んでもどうなっ

も構わん！だが、俺は死なない！凍華を悲しませるわけにはいかないんだよ！」

「……お兄様。」

（その覚悟と思い、気に入った。認めてやろう、貴様の全てを。そして、力を。）

最後に謎の声が冷司に聞こえると、光が収まりいつの間にか神龍帝王に重なる形で腰に差してあった。

「だ、大丈夫ですか？お兄様……えっ？」

膝を床に付けていた冷司へ凍華が近づくと、いきなり抱きしめられる。その抱擁はいつもより、優しく暖かった。

その冷司は姿が少し違った。ブレザーの下部分が伸び、コートのようにになっている。背中には黒い龍騎士の紋章の黄金版があり、顔のほっぺの部分に青い炎の模様……トリアルパターンが浮かんでいた。髪もいつものオールバックからツンツンとした髪型へと変わり、オーラらしき物を纏っていた。

それを見て凍華は嬉し涙を流しながら冷司へ誓いをたてた。

「ああ……お兄様、生まれ変わったのですね。凍華は嬉しいです。これからも、私はお兄様を愛し続けます。」

「ありがとう。その気持ちがあれば、俺はこれからもずっと戦える。母さんありがとう、この刀はありがたく使わせてもらうよ。」

「うむ、頑張ったの。」

そして彼女が後ろへ振り向くと同時に兄妹は学園長室を出る。扉が閉まると、そこには追いかけていた烈火がいる。しかし表情は真剣な物であった。そして聞こえるかどうか分からない感じで呟いた。

「このままじゃ、やられる。」

〔校庭〕

凍華と別れた冷司は気分がとても良かった。刀の効果か、いつも以上にいい笑顔を浮かべている。それを見た女子生徒はあまりのかっこよさに気絶したり、鼻血をたらしていた。そんな時、男子生徒が誰かを追いかけていた。

追いかけているのは女子生徒で見覚えがあった。そこまで、何とジャンプするだけでたどり着くと男子生徒を遮る。

「よう、雷美。また仕事サボって居眠りか？」

「あゝ会長。・・・ハッ！ち、違います！私はただ、このイエロースターで遊んでたら・・・スウー。・・・ハッ！何人が吹き飛ばしちゃっただけです！」

「自慢げに言うな！この野郎、我らがボスの赤石一磨の弁当と俺らをぶっ飛ばした！だからその体で弁償してもらっただけだ！」

雷美は凍華ほどでは無いが、スタイルはいい方である。それを聞いた冷司は一言だけ呟いた。

「・・・そこにいた、お前らが悪い。」

「何だとお！死ねえー！・・・ぐえっ！」

部下の一人が鋼鉄製のロッドを振り下ろすのと同時に何故か切り刻まれた。そして響くのは冷司が聖魔神龍刀を納める音だけだった。

「どうやら、俺はさらに強くなったようだな。来いよ、お前ら。」

「う、うわぁー！」

「く、くらええー！」

「どわぁー！」

等と叫びながら、部下達が向かってくる。しかし、その攻撃は全て躲される。そして一気に居合いで斬り裂かれていった。

「……二の斬、神龍一閃。」

「やってくれるじゃねえか！」

どこからか、現れた巨漢の男。どうやらこの男こそ、赤石一磨のようだ。それを見ても冷司は余裕の表情であった。

「生徒会の会計がお世話になったな。我が名は蒼炎寺冷司、眠雷美ねむらいみの無礼を許してくれないか？」

「断る。俺の食事タイムを邪魔したそいつが悪い。」

「ちゃんと、注意しない方がどうかと思っぜ。この暴食馬。」

「言ってくれるなあ。……死ねえ！」

その一磨は背中から大きな棒を振り下ろす。それをヒラリと躲し、棒の上に乗ると呟いた。

「スロー過ぎて雷美が寝ちまうぜ？」

「ふ、ふざけんな！どうして俺の攻撃が躲せるんだ！」

「そりゃ、ただ振り回しているだけの見かけ倒しだろ？本当の躲せない攻撃ってのはこう・・・やるんだ！」

次の瞬間、一磨の腕が空中へ吹き飛び消滅した。さらに、全身にも深い斬り傷が付きそこから青い炎が燃え盛る。

「ぎゃあああああ！あ、熱いいいいい！」

「どうして、逃げるんだよ。まだまだ、俺の戦いは始まったばかり。そして満足もしてないんだぜ？」

「や、やめ・・・」

次の瞬間、彼の首から血が大量に吹き出る。さらに、一磨は冷司に斬り続けられようやく冷司が刀を納めたときには彼の面影は殆ど無い屍がそこにあるだけだった。

「もう無駄だと思うけどさ、俺は常に三つの奥義を発動してる。常に敵の技とか軌道とか見えるのと、常に全力で戦えるのと、相手を知らない間に弱らせる領域を発動する奥義をな。さて、お前らのおかげで少しだけ俺らは成長した、ありがとよ。」

しゃべり終わると、彼の屍は刀に食われるように消滅した。その後

冷司が指を弾くと周りの風景が動き出す。彼の奥義はどつやら進化したらしい。

「会長、いつの間に終わったの？」

「あいつらが俺の名前で怖がって逃げたのさ。」

「さすが、会長！強いですね。」

「ああ。俺は、絶つっ~~~~~~~~対に負けんだ！」

彼の瞳は狂気と憎しみのこもったような瞳をしていた。彼はもうあの意味刀に支配されていた、心も体もそのことを誰も知らない。

暴走への一歩（後書き）

次回、さらに冷司は暴走するかもしれません。

龍はついに狂い出す（前書き）

今回は何だかグロいです。

龍はついに狂い出す

〈生徒会室〉

神火第一高等学園の生徒会。その生徒会の会計、書記、副会長、会長が集まる一室は何故か今回暗幕によって暗くされ、照らしているのは冷司の青い炎だった。そして、その中からいきなり指を弾く音が聞こえる。

「話をしよう。約二週間前、この学園には一人の転校生がやって来た。そいつの名前は炎堂烈火、不死鳥を模した真紅の炎を駆使して戦うあいつは未だ謎が多い。だからこそお前達はどう思う？」

暗幕が取られ光が差し込むとまずしゃべり出したのは、カウボーイハットをかぶった黄金に近い色のブレザーを着た少年だった。

「冷司の旦那。俺は別に気にする必要はねえと思うぜ？結局は問題を起こさなきゃいいのさ。」

彼の名前は撃鉄銃人^{げきてつがん}。冷司や凍華と同じく炎術師としてのランクは焰で武器は二丁拳銃である。性格は自由気ままな風来坊で世界中の女を愛していると豪語している。この生徒会での地位は副会長。

「甘いですね。ここはしっかりと監視すべきだと私は思われますが？」

その向かいに座る、片方の目に黒い眼帯をした紫色のポニテにピンクのメッシュを入れた彼女は毒沼桜^{どくぬまざくら}。生徒会の書記で規律などに厳しく、真面目。武器は鋭い刃がついた鎖であり、いつもは片袖に八本ずっしまっている。勿論ランクは焰で炎の色は何故か桜色である

（ここを指摘した生徒は翌日校門に鎖でつるされていた）。

「私は・・・ハッ！会長にお、お任せしますう・・・ZZZ」

常に寝ているような彼女は会計の眠雷美。先日冷司に助けてもらったりうつかり人を吹き飛ばすうつかり屋で怪力の持ち主。武器は巨大な鉄球にトゲを付け鎖で棒とつないだモーニングスターである。こう見えてランクは焰で炎の色はオレンジと黄色の間。

「それで！会長殿はどう思われますか！」

最後に叫んだのは二木^{ふたぎ}槍性格は真っ直ぐ且つ熱血。役員をまとめる役員長を務め、武器は二本の槍。他と同じくランクは焰で炎の色は黄緑。

「・・・」

「お兄様。」

「・・・あ、ああ。全員意見が違うから・・・今はあいつの件は保留にしておく。それより桜、最近生徒達が騒がしいな？」

「はい。どうやらこの学園の生徒達が男女関係なく襲われている模様です。」

「そいつは許せねえなあ。大事な子猫ちゃん達を傷つけるなんて、この俺がさせねえ。」

「そうか。因みにそれは誰の仕業か判明しているのか？槍。」

「役員達の調査の結果！万引きや恐喝などで悪名高い獄魔学園の生徒による犯行だと判明！しかも一部の職員と校長の我が学園への嫌がらせと分かりました！」

「ならば・・・先生。肅正を許可してくれますね？」

壁に寄り掛かっていた秋美先生（彼女はランクが爆炎で武器は鉤爪。炎の色はオレンジ）へ問うと無言でうなずく。それと同時に全員が立ち上がりそれぞれの武器を持ち部屋を出て行く。冷司は一瞬苦しむ表情になるが、直ぐ様出て行く。

「・・・気をつけてな。」

秋美先生は静かに呟いた。

（獄魔学園）

この学園は悪名高い事で有名だった。殆どの生徒や職員が色んな悪事に手を染め、最近では他の学園にも手を出していたらしい。

「さて、肅正の時間だ。雷美、門を壊せ。」

「はい。そりゃ！」

雷美が勢いよく門を持ち上げ無理矢理外すと、全員が入っていく。それと同時に一人の職員が目の前に立つ。

「君達。勝手に入って来ちゃこま・・・！」

いつの間にかその職員は体中に穴が開いていた。銃人が口封じのために行ったことである。

「他の子猫ちゃんを困らせてる奴がえらそうに言っんじゃないよ。」

「お前ら……行くぞ！」

「……はい（おおよ！はい。承知！）。」「……」

冷司のかけ声で全員が勢いよく学園へ入ると、別れる。その時の冷司は誰から見ても分かるほど、異常なオーラを纏っていた。

「食事の時間だ。」

（銃人編）

銃声と共にまた一人、また一人と倒れていく。しかも確実に間接や急所を撃ち貫かれている。それをやっているのは銃人だった。彼の持つ黄金の銃は彼専用のカスタム銃で、しかも何故か自在に弾丸が曲がっていた。

「俺の炎力が出るんじゃないかって憑依しているのさ！この銃と弾丸になあ！そら、狙い撃つてくぜえ！」

彼の後ろに黄金のユニコーンが現れると同時に螺旋状のオーラを纏った弾丸が大量に放たれ、悲鳴も出せないまま校舎の左側にいた生徒と職員は撃ち貫かれた。その生徒の中から一人の女子生徒を引張って来るところだった。

「君は逃げな。」

「えっ？」

「君だけは他と違う。さあ早く。」

「あ、ありがとう・・・」

これが彼の生き方である。

〈桜編〉

「正しき炎術師にふさわしくない者達。今からこの神火第一高等学校園生徒会、書記。毒沼桜が肅正してあげましょう。」

「ふざけやがって!」

一人の生徒が刀を振り下ろすが鎖で受け止められ、そのまま拘束されるとメキメキと締められ全身の骨を折られてしまった。

「どうしました?こんな物ではないでしょう?」

「うおおお!」

また一人の生徒が槍を刺そうとするが躲され、鎖をピンクの炎で熱すると一気に叩き付けた。その衝撃は凄まじく、遠くの生徒も吹き飛ばされる。

そこからさらに、縛りと叩きつけを繰り返している内に銃人のいた所と反対の部分にいた者も全員肅正されてしまうのだ(特に最後の生徒は炎の色について叫んだため恐ろしい姿へ変わった)。

「こんな人達がいるからいけないのです。」

〈雷美&槍編〉

「ぜえああああああああああ！貫いてくれるぞおおおおお
おおお！」

『ぎゃあああああああ！』

槍が槍を突き出し、一気に黄緑の炎と共に二階の左校舎の生徒と職員全員をたった数十秒で吹き飛ばしてしまう。

その反対側では黄色い炎を纏ったモーニングスターをただ振り回して吹き飛ばしているだけの雷美がいた。

「あわわわ。し、死にたくなかったらどいてください。」

『ぐはああああああ！』

結局、その場の全員が圧殺されてしまった。生徒会の肅正、それは炎術師としてあるまじき行いをしている者達の死を意味するのだ。そのため、生徒会の四人が倒した生徒や職員は全て殺されているのであった。

〈冷司&凍華編〉

だが他の者達より最も残酷なのはこの二人の兄妹だった。冷司はただ斬るだけじゃなく、焼却、刺突や奥義もフル活用しその場の生きている者は魔龍の宿る刀に全てを喰われてしまっていた。しかも冷司の目つきは狂気と憎しみに満ち、制服でも隠しきれない程にトライアルパターンが浮かび上がっていた。

「龍牙絶刀！龍神一閃！龍牙億文刃！貴様らの動きは全て覚えた！我が奥義は絶つっくくくくくくくく対に負けんのだあ！そこだあああ
あ！ちえああああああああ！」

『ニギヤアアアアア！』

全ての生徒、職員は斬滅されてしまう。首や四肢などを斬られ、縦や横に真つ二つにされ、全身を何度も貫かれて最後は刀に喰われる。刀の力によつて、冷司は強くなっただけでは無く暴走していた。

「お兄様……それでも私は味方ですから……」

凍華はそれを惚けた表情で見つめていた。自分が殺した者達の死体で作った山に座つて……兄が恐ろしく強いなら妹も同じなのだ。

（最後）

全員が外に出ると、いつもは帰る全員だが冷司が立ち止まると聖魔を抜き炎装、そのまま空に浮かぶと刀に今まで以上の炎を纏わせこ
う叫んだ。

「お前らの居る所も肅正してやるよ！」

大きな炎の刃が振り下ろされ、その校舎は完全に消滅。その中から残った死体と炎力が刀に喰われると同時に降りてくると冷司はいつもの表情で言つた。

「こんな俺と永遠に相乗りする勇氣があるか？」

「私は妹ですから当然です。」

まずは凍華が手を取る。

「あんたの強さを見れば、組まなきゃならないのは当然よ」

銃人も手を乗せる。

「会長にはただ従うのみですから。」

「まあそうですよね。」

桜と雷美も手を乗せる。そして最後に槍が手を取る。

「自分もついて行くのは当然だと思っています！」

「俺達はどんどん強くなる！」

冷司が手を掲げると同時に全員から炎のオーラが吹き出していく。それを見ている人物、赤い制服の烈火はいつもとは違う鋭い表情で呟いた。

「違う。強さを求めてるだけじゃ何も変わらない。」

今、運命の齒車はさらに回りだそうとしていた。烈火の過去とは？
冷司はどうなったのか？謎はまだ解かれていない。

龍はついに狂い出す（後書き）

感想をお待ちしております。

龍の妹もまた狂い出す（前書き）

今回は前回以上にグロいです。そしてヤンデレ要素が入っております。

龍の妹もまた狂い出す

「冷司の自室」

「ハア．．．．ハア．．．．ウグツ！グハツ！．．．．ハア．．．．ハア．．．．」

床に這いつくばって苦しんでいる冷司。彼の腰に差されている聖魔龍神刀は何度も妖しく輝き、その度に全身に青い炎のようなトライアルパターンがどんどん浮かび上がり大きくなっていく。上半身はすでに地肌が半分ぐらいしか見えない程、トライアルパターンに覆い尽くされていた。それを気にすることなく汗をぬぐい、上の寝間着を着るといつもの無表情で立ち上がる。

「まだ使いこなせていないという事か？おもしろい、もっともってお前らに血肉を与えてやる。」

それを扉の隙間から妹の凍華は眺めていた。ぎゅつと握っていた右腕からは血が流れているが、気にすること無く心の中で呟いた。

（お兄様は苦しんでいる。どうにかしないと．．．．）

そのまま凍華は兄が来るまで寝室で待つのであった。しかし彼女は知らない、自分もすでに刀の魔力に心を狂わされていることに．．．

「次の日」

いつものように二人一緒にバイクで登校し、近くの駐輪場に止めて学校まで歩いている途中冷司少し顔を歪める。

「お兄様。大丈夫ですよ？私、お兄様が苦しんでいるの見ていら
れません。」

「……安心しろ。俺は必ず、刀を使いこなしてみせるさ。」

「……はい。」

と校門の近くまで、やってきた二人の目の前に双子らしき少女が現
れる。

「「お久しぶりです！冷司さん。」」

「真琴に虚か。どうした？」

「だって今日からテスト期間じゃないですか。」

と先にしゃべる薄緑の制服で左目を前髪で隠している少女が姉の方
の事実真琴である。炎の色も髪と目の色も薄緑である。

「だから放課後、教えてもらおうって思ってた。」

後にしゃべる凍華の水色より薄い青の制服で右目を前髪で隠してい
る少女が妹の方の事実虚である。炎も髪と目も同じ色である。

「「ね？いいでしょう、冷司さん！」」

「お前ら二人だけでやってろ。俺は凍華と勉強するからな。」

「「え〜」」

「わがママを言うな。」

そのまま兄妹は歩いて行くが、凍華の目からは光が消えていた。ただ、これはまだ惨劇の始まりでしかない。

（昼休み）

屋上で冷司、凍華、翔が昼食を食べていると未だに話題の転校生烈火がやってくる。そして三人の近くに座る。

「皆さん。一緒にどうですか？」

「俺はいいぜ。友達だしな。」

「私も構いませんよ。」

「……勝手にしろ。」

そこからは何故か全員一言もしゃべらず、黙々と食べる。烈火と冷司の仲は最悪なためではあるが、そこへさらに雰囲気悪くする人物がやってくる。

「冷司さーん、レッ君ー。一緒に食べましょうー」

そう事実姉妹が弁当を持って屋上へとやってきたのだ。それを見ると男子陣は苦笑したり、普通に会話したり無反応なのだが凍華だけは違った。

「あれ？凍華さん、気分でも悪いの？」

「本当か!？」

「…………大丈夫ですよ、お兄様。二人とも、心配してくれてありがとうございますね。」

先に食事を終えた、凍華はスタスタと屋上を出る。それに続くように冷司も屋上を出て行き、残りの四人もそれぞれ食事に戻るのであった。しかし、男子二人はこの時数日後にはもう二度と会話をすることは無いという事を知らない。

〈三日後〉

テストがもうそろそろで始まるうとしていたとき、いつもの様に兄妹が登校していると冷司に抱きつくようにあの双子がやってくる。

「冷司さん、おはようございます!」「」

「…………ああ。」

これが双子の性格であり、それを気にしない冷司であつたがそれを見ている凍華の目は光を失っている。そして何かをぶつぶつ呟いている。

「凍華さんも、おはようございます!」「」

「…………はい。おはようございます、二人とも勉強は放課後、私が見てあげますね。」

「本当ですか!?!」「」

「ええ。頑張りましょうね……………」

兄が狂っているならその妹も狂っている。それを表す事になろうとは今は誰しも思っていない。

〈放課後〉

確かに勉強会は行われていた。凍華と真琴、虚の三人のメンバーで普通の勉強会だった。分からないところがあれば凍華が教えるという感じでスムーズに行われていたが、惨劇の開演がついに行われようとしていた。

「休憩も含めて、体を動かしません？体育館で。」

「体を動かして脳を刺激！」

「って、事ですね！」

「「やりましょう！」」

そして三人は体育館へと入り、凍華は扉を閉めると鍵を掛けスイッチで明かりを付ける。それを気にすること無く双子はバスケットをやり出している。その二人に凍華はあの目から光が消えている状態で話し掛けた。

「そういえば、どうして二人はお兄様にあんなに近づくんですか？」

「うん。私はただ仲良くしたいだけですよ。」

「私は、普通に好きな人だから！」

それを聞いた途端、凍華の目つきが鋭くなる。そして背中に隠して

あつた龍王妃を取り出すと、虚に近づく。

「「どうしたんですか？武器をいきなり取り出して？」」

「模擬戦でもしようかと思って……………」

「じゃあ、私達も武器を準備しなきゃ。」

「そうだね！」

二人が自分の武器であるツインダガーを取りだそうと近くまで持ってきたバックに手を掛けたその瞬間何だかよく分からない変な音になる。

「あれ？今の音何ですか？」

「…………ああ。肉を貫いた音ですよ。」

「え？ここに肉なんてありました？」

「ええ。私の目の前にちょうど大きな肉の塊が一つ。」

「凍華さんの目の前？それって……………」

そして虚が自分の胸の部分を見ると、青い炎を纏った大きな鎌の刃が突き抜けていた。それを見るの同時に虚の口から大量の血が吐き出される。

「ゴフッ！…………何ですか？凍華さん。私…………私……………」

「真琴さんはまだいいですよ。お兄様と友達になりたいだけだから。でもあなたは私の目の前で好きと言った。それって恋人になりたいって意味ですよ。そんな事させると思いますか？させるわけないじゃないですか。だって……お兄様は私だけの物。私はお兄様の物。お兄様に近づく雌豚は私が処分するって決めてるんですよ。」

「ああ……虚。どうして……？」

「まだ分からないですか？真琴さん。あなたの妹は私からお兄様を奪おうとしたんですよ。だったらそうなる前に処分しなきゃ……」

そして刃を抜き去ると、無理矢理立たせ今度は腹に槍の部分を突き刺す。

「グエツ！……ゴハツ！い、痛いよ……ぬ、抜いて……
ください、凍華……さん。」

「泣いたつてもう許しませんよ？お兄様は渡さない。お兄様は絶対に渡さない。お兄様は渡せない！」

それからさらに、抜いては刺すという行動を繰り返すと今度は両腕を肩の部分から斬り裂いた。

「ああああああああっ！私の腕！腕が無くなって！お姉ちゃん、助けてよおおおおお！」

「腕だけじゃないですよ？」

休む間もなく、両足を躊躇無く凍華は斬り裂いた。虚はもう痛みが限界以上超えているため悲鳴すら出さず、泡を吹き白目をむいていた。真琴はその様子を恐ろしい物を見ている表情で見てるしかった。

「ほら、まだですよ。何休んでるんですか？立ってください。ああ、足がもう無いんですよ、だったらこのまま処分してあげますね。」

光の無い目と歪んだ三日月の様な笑みを浮かべながら、虚の全身を青い炎を纏った龍王妃の槍の部分で何回も貫き、斧の部分で叩き潰し、鎌の部分で八つ裂きにする。そしていつの間にか凍華の周りには虚であった者の一部がぐちゃつとした感じで散らばっており、そのどれもが青い炎にじわじわと焼かれていた。

「さて、次はあなたですよ？真琴さん、よく考えればあなたも同罪なんですから。」

「い、いやあああああああああああ！」

血だらけのまま、龍王妃を引きずって近づく凍華に恐れをなし出口の所まで走り扉を何度も開けようとする。しかし鍵が掛かっていることにも気づかず何度も開けようとする。

「だ、誰か助けてよ！お願いだから！もう悪い事しないから！だっ・・・！」

次の瞬間、扉にはべつとりと赤い何かが飛び散った。その直後その体育館にだけ、悲鳴が響いた。

「あなたが悪いんですから。私はただお兄様を守っただけなんで

すから。」

数時間して、いつもの優しい笑顔で体育館を去る凍華。その体育館には何も……何も残って等いなかったのだ。

「ふふふ。」

「どうした凍華？」

「お兄様は相変わらずかっこいいなって、思っただけです。」

「フツ、そうか。」

何事も無かったように帰る二人、その後ろを烈火はまた真剣な表情で見つめていた。その直後聞き慣れない声が響く。

『おい。あのまま放っておいたらあの兄妹は自滅するぞ。』

「分かってるよ。次になんかあったら僕が……俺が止める。」

『チツ。お人好しな奴だ。』

「だってそうでしょ？届くはずなのに、手を伸ばさなかったら一生後悔する。昔の俺とお前みたいに。」

『そうだな。』

その直後、烈火の右腕は異形に変化し背中から赤く輝く炎の翼が赤い羽根を散らしながら出現した。

龍の妹もまた狂い出す（後書き）

感想をお待ちしております。

真紅の不死鳥、舞う（前書き）

今回は長いです。

真紅の不死鳥、舞う

学校で真琴と虚が消えてから数週間後、聖なる炎の眠りという時期に入り国を守るオーラが何日間か消える事によって雨が降り注ぐ中、烈火はついに行動を起こそうとしていた。

「今日、この黒火学園を生徒会が肅正するらしいんだ。」

『ほう？よくそんな事が分かるな。』

「教えてくれる人がいるからね。さてそろそろ隠れないとね。」

そうやって近くの草むらへ隠れると先程まで烈火がいた所に生徒会が集まっていた。そして何かを話し合った後、校門を破壊し中へと入っていく。その後に草むらから飛び出すと自分の武器であるバーニングブレイズを構える。

「生徒会の皆さんは悪気があってやってるんじゃない。その証拠に生徒一人一人を倒すときの表情が悲しみにあふれている。でもあの兄妹は違う、躊躇とかそういう物が全くなくて悪と決めつけたら跡形残らず消そうとする。」

『ほんと、融通の利かないあの頃のお前だな。』

「自覚はしてる。でもそれは君もだったじゃないか、ロスト。」

その直後右腕が異形へと変わりだし、勝手に動き出す。

『んな事は分かってんだ！早く助けるなら助ける！』

「素直じゃないな……」

その様子に烈火は苦笑しながら学園の中へと真剣なまなざしを向けながら走っていくのであった。赤い羽根を散らしながら……

「異変に気づく生徒会」

その頃、銃人と桜は自分の武器を駆使しながら生徒達を倒していくのだが……

「銃人さん、気がついてますか？」

「ああ。この学園はかわいい子猫ちゃん達が少ねえって事だろ？」

「……冗談で言っているならあなたを縛り付けます。」

と言って桜色の炎を纏った鎖の先端を近づける。その様子に銃人はあせりながら急いで反論する。

「分かってるよ！あれだろ？ここの生徒の殆どが戦う意志がねえ、もしくは無害な生徒だってな。」

それを聞いてようやく鎖をしまつ。二人が話し合っているようにここの生徒達は殆どが戦う意志が無いが、無害な生徒である。そのため襲ってくる生徒もとどめを刺さず気絶させているだけであった。

「どうして会長はこんなほぼ平和な学園を選んだんでしょう？」

「てか最近はいつもじゃねえか？今思い出してみれば、肅正すればするほど無害な奴らが増えてるって感じた……」

「……もしかして、名前だけで決めてるのでは？」

二人はその事に顔を青くさせ、ただ立ち尽くすのみであった。

〈二階〉

雷美と槍も気づいていた。そのため素早く肅正を停止し、学園その物の様子をうかがっていた。そして静かに呟くようにして話し始めた。

「雷美殿、やはりこの学園の生徒はほとんどが無害なようです。」

「うん。それは分かったけど、会長と凍華ちゃんはどうしているのかな？」

「分らないですが、何か胸騒ぎがして落ち着いていられません！」

「落ち着いて。でも、その時のために救援は呼んだからね。」

槍は頭をかしげるが、雷美はいつもの眠そうな表情でただ見つめるだけであるのだった。そして三階でついにあの二人が対峙するのであった。

〈三階〉

兄妹は案の定、生徒や教員を斬って、貫いて、燃やしていた。抵抗してきた者は徹底的に倒し、抵抗しない者や逃げだそうとした者も斬滅しその死体は全て魔龍の方へと喰わしていた。そして最後に残った生徒を斬ろうとしていた時だった。

「待てえ！」

「……何だ？転校生、こんな所にまで来て説教か？」

「そうですね。あなた方二人にはちょっと聞いて欲しい事があったので。」

「良いですよ。今回は特別に聞いてあげます。」

冷司と凍華は武器を納めるが、冷司の目には狂気と憎しみが渦巻き凍華の目からは光が消えていた。

「まずは冷司さん。どうしても無残に他の生徒を殺そうとしているんですか？」

「肅正だよ。俺の学園が悪影響を受けないためにな、今までずっとやって来た事さ。」

「だからって無関係な人も巻き込むんですか？」

「違うな。悪影響を与えそうな学園にいる生徒は関係なく悪だ、だから立派な肅正さ。」

「じゃあ凍華さん、真琴さんと虚さんを消したのはあなたですか？」

「ああ、あのお兄様にべたべたしてた双子にはちょっとおしおきしただけですよ。」

「……俺のやるべき事は決まった。」

烈火の周りから真紅の炎が巻き起こる。烈火の目つきが鋭くなると

さらに炎は勢いを増す。

「あんたら二人はお互いにすごく仲の良い兄妹だと思っていた。だけれどその変な刀を手に入れてからは違う。兄は自分と刀を強くするため、無関係な人まで巻き込み自分の力と地位に溺れるようになった。妹は自分と兄の存在を関係を維持するためだけに無実な双子を殺した。さらには！自分の所属する生徒会を使ってまで大量の虐殺を行った！俺もさすがに頭にきたぜ！」

それにひるむことなく、冷司と凍華も炎を巻き起こす。そして武器を構えると冷司達も叫ぶ。

「分かったような感じに話すなよ？たかが転校生といえど一度お前は俺に敗北した！神火学園の生徒会長でありそして最強の名を欲しいままにする力を持つ俺達を怒らせた事を後悔させてやる！」

「結局お兄様の侮辱ですか・・・あなたもお兄様の近くから消してあげます！」

その直後冷司が強烈な斬撃を放つが、それを烈火は躲しブレイズがら羽のような火炎弾を飛ばす。

「フェニックスフェザー！」

兄妹はそれを軽く跳ね返し、今度は凍華は龍王妃の斧の部分を連続で叩き付けてくる。

「さっきから逃げてばっかでもいいんですか！」

「フェニックスナックル！」

龍王妃を掴むと、左腕に炎を纏わせ強烈な一撃を放つが何とそれを冷司が無傷で受け止めていた。そして高速の斬撃を放ち距離を取る。

「残念だったな。凍華は元々強いし、俺はさらに強くなっていくからな……」

「それだけか？」

「何？」

「大事なことはそれだけかって聞いてるんだ！」

その様子に冷司は当然のように答えた。

「当然だろ？地位、力、最強の武器。そして俺は凍華があれば十分だ。」

「私も似た感じですね。特にお兄様ですが……」

その時、烈火の何かが動いた。それと同時に背中に赤く輝く大きな翼が現れる。

「そうかよ。あんたらはやっぱり昔の俺と同じだ。地位に捕らわれ、力に自惚れ、最強の武器を求め、誰かにしか興味を示さない。そんなんじゃないずれ、自らを滅ぼす。」

「それはお前が弱いからだ。俺らは違う、他の奴らとは違うと言われながらも父を失いながらも俺達は強く強く生きてきた。そして強

「くなった！貴様のような愚か者とは違うんだよ！」

「その通りです！」

兄妹は武器に今まで以上の炎を纏わせ、烈火に強烈な一撃を放つ。その衝撃で学園の三階が全て吹き飛んだ。それに気づいたように生徒会の全員がやってくる。

「おいおい会長なにやってんだ？」

「ちょっとした邪魔を吹き飛ばしただけさ。」

そして帰ろうとしたその時、何かが後ろの方に感じられる。そこにいたのは不死鳥を模した真紅の鎧のような物を纏った烈火がいた。

「あんたらはまだやり直せる。いや！俺がやり直させる！」

「やり直す必要も無い！」

そして冷司も全身に炎を纏い龍のような鎧を纏う。そしてお互いに刀と剣を向けると叫んだ。

「俺のような後悔はさせない。絶対に！」

「お前ら、手を出すな。あいつを吹き飛ばす！」

こうして、彼らの運命を進めるための大きな戦いが始まった。

真紅の不死鳥、舞う（後書き）

次回で終わるかは自分でも分かりません

龍と不死鳥、激突（前書き）

まずは烈火と冷司のバトルから。

龍と不死鳥、激突

烈火はかつての己が犯した罪を兄妹にも犯させないために、冷司は自分と妹の存在と力を示すために、二人は雨の降りしきる中で空中に舞い上がると直ぐ様ぶつかつた。二人は炎装よりも強力な炎鎧装を発動しながら、空中を飛び回りながら剣と刀をぶつけあつた。何度も何度もぶつかり合い、その度に真紅の羽根と青い鱗が舞い落ちる。

「フェニックスフェザー！」

少しエコーのかかつた声で烈火が叫ぶと、背中の真紅の赤い翼が一回り大きくなり鋭い羽根の弾丸を大量にかわそうとする冷司を高速で追尾するように放つていく。しかし、それを冷司は全て纏めて青い炎を纏つた斬撃の一振りで打ち消した。

「こんな羽根手裏剣ごときで墮とせると思ふな！」

冷司もエコーのかかつた声で三日月状の斬撃波を大量に放つていく。だが烈火もそれを、高速でかわしていき冷司に接近すると己の剣を振り下ろすが……

「龍牙斬刀流奥義！二の斬、龍神一閃！」

目に見えない斬撃が大量にしかも高速で放たれる。烈火には冷司が鞘から刀を抜く瞬間すら見えない程の光速の斬撃が一瞬結界のように見えたため、何とか烈火はかわせたが装甲の至る所に青い斬り傷がつく。

「光速には光速だ！フェニックスドロップ！」

烈火は背中 of 4枚の羽根を完全に展開し、光速で接近しながら両足に鋭い爪を出現させつつ炎を纏い両足蹴りを放つ。それを冷司は黙って受け止める。それを見ていた生徒会達は驚く。

「おいおい、会長さんあの一撃をかわさなかったぞ……」

「まさか、会長殿が……」

銃人と槍が呟くと、凍華はそれに対して微笑みながら呟いた。

「安心してください、二人とも。お兄様はそう弱くないし、それにあれはかわす必要が無いんですよ。」

「妹様、それは一体どういうことですか？」

桜が凍華の言った言葉に疑問を持ったその時、生徒会の近くの教室があったとされる場所に勢いよく烈火が叩き付けられ、1階まで落ちていった。そして全員が空を見ると、無傷の冷司が青い炎の翼をばたかせながら浮いていた。

「烈火、貴様の一撃は確かに凄まじい威力だ、感動的だ、だが無意味だったようだな……。俺の奥義の一つ、十の斬「壁龍刀防」の絶対防御を破ることは不可能なんだぜ？」

そう、烈火が放つフェニックスドロップは直撃する寸前に冷司の発動した壁龍刀防の絶対防御の壁に阻まれダメージを与えられず、炎を纏った尻尾の一撃でたたき落とされたのである。しかし……

「フェニックスブレイズ！」

烈火はその1階部分から、強力な火炎を冷司に向けて放った。その突然の攻撃に冷司は少し驚きながらも聖魔の斬撃を放ち、それで火炎を真つ二つにしつつ、烈火へ直撃させる。それによって学園の一部に大きな斬り傷が付く。すると・・・

「うおおっ！どうやらまた俺は何人かの力を吸ったようだ。」

冷司の聖魔が輝き、1階部分からオーラの様な物を吸収した。さっきの斬撃はこの学園の生徒を何人が巻き込んでしまったのである。一方、烈火は床に叩き付けられる前に黄色い綿の様な物をクッションにしたためにダメージは無く、斬撃も炎で打ち消した。

「ふう、雷美さんが協力してくれなかったらやられてた。」

『ハッ！女に守られるなんてざまあないな。』

「ロスト、黙ってる。」

右腕と会話すると、誰にも気づかれること無く協力してくれている雷美に感謝しながら勢いよく飛翔した。そしてそのまま炎を纏い、冷司に突撃する。

「はあああああ！」

「バカが！もう一度、弾き返してやるぞ！十の斬、壁龍刀防！」

冷司は仮面の奥で笑いながら、壁龍刀防を発動し烈火の突撃を弾き返そうとするが何と烈火は高速で回り込み、背中へ突撃した。それ

と同時に大爆発が起きる。

「妹様、会長は……」

「まだ、生きてますよ。」

桜が冷司を心配して凍華に聞くと、まだ生きているという。あんな一撃でまだ生きていられるのかと空を見ると……

「言っただはずだ……。この奥義は、絶対防御の奥義だ！」

「なっ、後ろも守ってるのか！」

未だ無傷な冷司と、それに驚いている烈火が見えていた。冷司はその隙を突き、足に聖魔を付けると縦に高速回転し一気に烈火を斬り裂いた。

「うぐわあああああ！」

「八の斬、翔龍炎爪牙！」

円形チェーンソーに斬り裂かれるように烈火の装甲にどんどん斬り傷を付け、ついに装甲を削り取り烈火の胸に大きな斬り傷を付けた。

「ゴハッ！」

烈火は仮面の口の部分から大量に血を吐き、墜落する。それに追撃をかけるかのごとく、冷司はあの奥義を発動する。

「烈火！貴様の覚悟は結局この程度だと教えてやろう！九の斬、神

龍無双！」

冷司が叫ぶのと同時に、風景が一変する。冷司から全域に広がるように青い炎のオーラが広がり、全てを包み込むとまるで時が止まったかのごとく冷司以外の全ての動きが止まる。これが彼の最強の奥義の一つで世界を支配出来るほどの強大な力を持つ絶対領域「神龍無双」なのである。

「これが俺の領域だ……」

ゆっくりと落ちたまま動きの止まっている烈火の目の前に立つと、聖魔を装甲から見えている烈火の胸に狙いを定め腕を後ろに引き、呟いた。

「一の斬、龍撃絶刀。」

それと同時に放たれる、強烈な突きが烈火の胸を貫き背中 of 鎧まで貫通する。口から血しぶきが飛び、空中で止まる。そしてため押しとばかりにもう一度、龍撃絶刀を放ち腹の部分を蹴り学園の校舎側へ方向を向ける。

「こんな奴が……どうして俺に挑んできたのか……まあ、ファイナーレはあっけなかったな。」

それと同時に全てが動き出し、烈火は学園にものすごいスピードで吹き飛ばされた。さらに学園の中を壊しながら進み、そして通り抜けると巨大な木に激突しそれにめり込む事で動きを止めた。

「ぐっ……ぐわあああああああ！い、一体……何が……」

烈火の炎鎧装は解け、胸と口から大量に血を吹き出す。烈火には何が起きたのか、全く分からなかったのである。

（俺は……このまま終わるのか……また、何も救えないまま……）

握っていたバーニングブレイズにはひびが入っており、ロストと呼ばれた右腕は灰になるうとしていた。そこでロストが叫ぶ。

『おい烈火！何あきらめてんだ！お前、またあん時みたく大切な物全てを失う気か！』

それを聞いた烈火の瞳に再び炎が宿る。そして烈火の頭の中で蘇るとある記憶、それはかつて自分が真紅の不死鳥として活動していた時に起きたとある悲劇の記憶。

（待っている！今、助ける！）

（やめろ烈火！お前、また暴走するかもしれないぞ！）

（だまれ！あの子なら俺に無かった物を埋めてくれるかもしれないんだ！）

（……お兄ちゃん、どうして助けてくれなかったの？）

（う、うわあああああああああ！どうして！俺はただ力を望んだだけなのにいいいいいいいい！！）

それを思い出す度に自分がしてきた過ちを思い出す。力を求めすぎ、

地位に溺れ、最強の武器が大事だと思っていたあの時の自分のように罪を犯す者が二度と出ないように今まで旅を続け、神火学園に来た。そこで出会ったあの兄妹は何としても救わねばならない。そしてかつての自分を助けてくれた親友と少女に似た友達のためにも戦い続ける。罪を償うために……

「そうだったな……俺は元とはいえ不死鳥！何度でも蘇ってみせる！」

烈火は大きく叫ぶと、再び炎鎧装を発動。背中の翼を大きく広げ、冷司に接近し不意打ち気味に両腕に炎の翼を出現させ、強烈なパンチを連続で放つ。

「フェニックスラッシュ！」

「何っ！？ぐわあ！」

それに対応出来なかった冷司の顔面を捕らえ、仮面ごと殴り飛ばすとすかさず全身にパンチのラッシュを放つ。それによってついに冷司の装甲をいくらか破壊する事に成功した。

「俺は！絶対に！あきらめない！」

そして最後に右腕に最大出力の炎を纏わせたパンチで冷司を地面に叩き付けた。その衝撃は凄まじく、冷司の鎧をいくらか破壊し地面にクレーターを作るほどだった。

「がはああああああ！」

「お兄様！……やっぱりの人も私が殺します！」

兄が傷つけられた事によって激昂した凍華も炎装し、飛び立とうとするがそれを雷美がモーニングスターの鎖を巻き付けることで押さえつける

「だめだよ凍華ちゃん。あれは二人の戦いだよね？」

「……あなた、まさかあの人に協力しているんですか……」
「？」

「うん、そうだよ私も二人を止めようとしてたもん。」

それを聞いた瞬間、凍華の龍王妃が雷美に振り下ろされるが雷美は己が使うモーニングスター「イエロースター」で防ぐ。

「……だったら、私はあなたを潰してでもお兄様を助けます。」

「うん。いいけど本気で来なきゃやられちゃうよ？」

「愚問ですね……私は最初から本気です！」

二人はお互いの得物に炎を纏わせ、最初の一撃をぶつけ合うのであった。もう一つの戦いが今、始まった。

龍と不死鳥、激突（後書き）

次回は雷美と凍華のバトルです。

己の思い人のために・・・（前書き）

今回、闇夜の黒鳥さんの小説のキャラが名前だけ出ます。

己の思い人のために……

雷美はいつもはあまり開かない瞳をしつかりと開き、雨の降る曇り空を確認する。そして黄色で彩られた棘付き鉄球を鎖で棒に繋げたハンマーの一種「モーニングスター」であるイエロースターを肩に担ぐ。その目の前には床に槍、鎌、斧、棍の特徴を持つ「ハルバード」である龍王妃を突き刺している、神火学園最強の生徒会長、蒼炎寺冷司の妹で女子生徒最強の、蒼炎寺凍華が濁った青色の瞳で自分を睨んでいた。

（本当は今日、総君とデートだったんだけどな……）

先月、漸く交際し始めた自分より年下の変態だけでも紳士で優しい恋人との予定を思い出しつつ、イエロースターを振り回し凍華へ振り下ろす。しかし、大きな金属音とともに弾かれ、青い炎を纏った斬撃が迫る。いつの間にか凍華は床から引き抜き炎装状態となつて宙に浮いており、まるで海を泳ぐ人魚のようである。そんな凍華の放った斬撃をイエロースターから出現させた黄色い炎の綿あめのようなクッションの壁で、斬撃を防いだ。

「死んでくださいよ……楽になれますから！」

笑顔だけど怖い、そう思いながら次々と迫る斬撃を雷美はクッションのような壁で防いでいく。その度に凍華は舌打ちをしながら追ってくる。

（間に合うかな？総君とのデート……まあ、今は凍華ちゃんを止めなきゃね。）

自分のこの後の予定と、仲間を止めれるかという事を心配しつつ雷美はほとんど学園の奥へと進んでいった。

凍華には昔から友達らしい友達という物が無かった。いや必要なかった・・・兄がいるからである。自分をいつも守ってくれる兄、作ったご飯をいつもおいしいという兄、何か軽い病気に掛かっただけでもすごく心配してくれる兄。そんな兄が大好きだから友達なんて必要ない。それでも友達のような物を作り、優しく接していたのは兄が友達を作っておいた方がいいと言っていたからというだけである。そんな彼女が唯一心から接していける友達は三人程しかない。

（美優さん、薫さん、優花さん・・・こんな私でも友達って言うてくれますか？）

心の中でその友達に呼びかける。自分の心の内に秘めてる感情全てを受け止めてくれた、本当の友達といえる彼女達ならまた受け止めてくれるだろうか？あまり面識がないとはいえ、自分と同じ学園の生徒を二人もただ兄にベタベタしていたという理由でこの世から存在を消し去って血に汚れた自分を受け止めてくれるだろうか？そう思うと自然に涙がこぼれ、自分の纏う水色の炎で蒸発する。そして逃げ続ける雷美に向けて炎の斬撃波を連続で放つ。しかし、それを雷美はイエロースターに纏わせた黄色い炎の一撃で相殺する。

「・・・もう、戻れませんよね。お兄様、私を抱きしめてください・・・この戦いが終わったら。」

一瞬光を取り戻した瞳の状態で眩き、そのまま瞳を閉じ再び開ける。その時には完全に光の無い水色の瞳であった。そして二人は壁が無

雷美も大量に吐血し、コートの腹部を赤く染めるが龍王妃を掴んで離さないようにすると、イエロースターの打ち手の部分を凍華の肩に刺す。再び凍華は悲鳴を上げ、膝を折りそうになるが無理矢理打ち手を肩から引き抜き、今度は龍王妃の槍の部分も突き刺す。

「ひぐつ！・・・ゲホッ！・・・ゲホッ！・・・元に戻つてよ凍華ちゃん！」

赤い部分を増やしながら、炎のクッションを凍華の太ももの部分にくつつけ爆発させる。

「うぐつ！・・・あ、あああああああああつ！」

龍王妃を引き抜き、鎌の部分を雷美の肩に引っかけ大きく振り下ろす。雷美の右肩から、右太ももまで斬り傷が付き大量に血が周りに飛び散り、噴出する。雷美は一瞬意識が飛んだが、それに絶えるとイエロースターの鎖を凍華の腕と腰を縛り付けるように巻き付け、黄色い炎を一気に流した。それが凍華に触れるとクッションと化し、そのまま爆発して凍華の全身を焦がし雷美に負けなくらいに血を噴出させる。

「ハア・・・ハア・・・凍華ちゃん、どうかな？まだやり直せるんじゃない？」

「無理ですよ・・・もう遅いです。私の罪は消えません・・・」

「それでも、その罪を背負って生きれば良いんじゃないかな？」

「それもいいかもしれませんが・・・ですが、私の人生にはいつも・・・いつも・・・」

凍華も雷美も血みどろになって、泣いていた。二人が何を考え、何を思っ泣いているのか分からない。ただ、二人には大事な人がいる。その大事な人への思いが二人を動かしているのだ。

（ああ．．．お兄様、あと一回だけ龍王妃を振らせてください。そして．．．）

（総君．．．デートは無理だけど、必ず連絡するから迎えに来てよ。そして．．．）

もう二人は炎を纏ってない、涙も蒸発した、そして態勢もフラフラでそのまま武器を構える。その時、時がゆつくりとなった。そのゆつくりとした時の中を二人は目の前の敵に向かうように歩き、武器を引きずっていく。二階に避難していた銃人、桜、槍がゆつくりと何かを叫びこつちを見ながら走ってきている。だが二人には聞こえず、そのまま大きく振りかぶると同時にこう心の中で呟いた。

（（抱きしめてください／抱きしめてね．．．））

次の瞬間、二つの閃光が交わった。肉を斬り裂く音も、骨を砕く音も、武器のぶつかった金属音も無く二人は倒れていた。三人の生徒会が近寄る。二人とも安らかな表情を浮かべていた。

「死んじゃったのか．．．？」

「う、嘘です．．．妹様が．．．」

「．．．！まだ息が二人ともあります！」

槍の叫びに二人はホツとした笑顔を浮かべる。本来なら相討ちになるはずだった二人は何故武器をぶつけることなく同時に倒れたのだろうか？もしかしたら、神がまだ生きると言ったのかもしれない・・・

その頃、冷司はようやく目覚めていた。凍華が自分に何かを呟いた気がしたなと思いつつも首を振り、冷司は未だ荒い息を吐きながらバーニングブレイズを構える烈火を睨む。そしてゆっくりと立ち上がり、今度は聖魔を二本同時に抜き呟いた。

「何か・・・すつきりした。そして懐かしい夢を・・・見ていた気がするぜ。」

「そうかよ・・・でもあんたはやり直そうとはしてねえ。その刀を手放そうとしてもしてねえ！」

「・・・こいつを手放しても凍華を守れるのか？」

「・・・さあな、でもあんたは十分強いと俺は・・・今は思う。」

そこから二人は再び、黙り込み睨み合う。雨は止み、ただの曇り空となった一つの学園であった物があつた校庭で二人は得物を構え炎を纏わせる。二人の最終決戦が今始まるうとしている・・・

己の思い人のために・・・（後書き）

次回で一端終結します（バトルだけは）。

戦いの終わり（前書き）

今回で決着が付きます。

戦いの終わり

俺は妹の凍華さえいればそれでいいと思っていた。あいつの初めての恋人は俺で、俺の初めての恋人もあいつだった・・・笑ったり、泣いたり、怒ったりするタイミングや出来事、好きな景色や雑誌に至るまで俺達兄妹は相思相愛、一心同体だった。そんなあいつがある日の夜、泣きながら俺に相談してきた。大事な俺の学園の生徒を殺してしまった。一方的にその命を奪ったとあいつは俺に泣きついてきた・・・その日、俺も自分の罪に気がついたんだ。俺は凍華以上に人の命を奪っていた・・・炎術師らしからぬ行動や態度の生徒を何人この魔龍に喰わせただろうか。それでも俺達は知らんぷりを続けようとした、でも無理だった。なあ、烈火。俺達二人はただやり直せるか？

「ハアッ！」

「くっ！？・・・斬撃がさらに鋭くなってる・・・！」

冷司と戦っていた烈火は彼の何かが変わった事に気がつく。烈火はその変化によって更に鋭く正確になった斬撃を何とか弾いていくが、どんどん押され結局は大きく斬り裂かれ校舎の壁にめり込む。

「ガハッ！・・・あんだ、急にどうした？」

「俺はな・・・とくに自分の罪を知っていた・・・それでも皆付いてきてくるから気にしなかった・・・でも妹が受け入れるって言うから今受け入れた・・・それだけだが？」

烈火の問いに答えると、冷司は神龍無双を発動し全ての動きを止め

烈火の目の前に立つと懷から何本もの短刀を取り出す。

「お前の言う通りだ・・・俺も凍華もとくに重い罪を背負ってる・・・でもな、この地位と家系と力がある限り生きていけるといふ事にも気がついた・・・まあ、今は決着を付けようか。」

烈火に向けて冷司は、短刀をどんどん投げていく。そして烈火の目の前を覆い尽くす程になった瞬間、奥義を解除する。

「こ、これは！？う、うわあああああああつ！」

突然変わった自分の状況に驚きつつも、短刀を弾き返すが全ては弾き返す事が出来ず何本も体中に刺さり、烈火は壁から地面へと落ちていくが地面スレスレで何かが烈火を抱え、着地する。

「この雰囲気、翔か！」

「」名答！」

その正体は炎装している翔で、烈火に刺さっている短刀を引き抜くと烈火の肩を掴み叫ぶ。

「負けてんじゃねえぜ、烈火！あいつはお前を受け入れつつある、だからこそ全力で行かないと駄目だろうが！」

「・・・分かってますよ。彼とはまだ決着が付いてませんから！」

烈火はそのまま炎の翼を広げると、空へと飛び立つ。そして冷司の目の前で浮遊状態になるとバーニングブレイズを両手で持ち、横に広げるとその持ち手の部分が分かれ鎖に繋がれた双剣となり炎を纏

わせると、再び口調が変わる。

「剣と刀、表裏一体の武器を使うんだ……あんたも本気を出せよ。」

「……無論だ。」

冷司も聖魔を抜き、さらにそのまま鞘に収まっている神龍帝王を持ち手の部分で合体させ引き抜き、双刃剣としての姿を見せると、その二つを合体させ巨大な手裏剣の様な武器を形成し、烈火以上の炎を纏わせる。

「二刀流、四刀流に続く全てを斬り刻むための最終形態、その名を「龍王爪牙」と呼ぶ！」

「こっちは双剣とヌンチャクの特徴を併せ持つ、「ヴァゴリアンフレイル」！」

二人はお互いに睨み合うと、静かに構え数秒の後に直ぐ様ぶつかり合う。重そうな龍王爪牙を片手一つで振り回し多段斬撃を浴びせる冷司と、ヌンチャクの様な不規則な動きで死角から斬り刻もうとする烈火。二人の戦いは正に何か特別な技を使わない、自分の技量と力だけでぶつかり合う真剣勝負となっていた。そんな真剣勝負の中で傷つき、傷つけていく中で笑顔を見せる二人の戦いにもう言葉はいらない。ただその美しい炎を燃やし続けていた……

「冷司の旦那は……どうして俺達に相談しなかったんだろうな……」

「分かりません……ただ私達や妹様に心配を掛けたくなかった

のでしょうか……」

「自分は今……この戦いに感動しています……」

生徒会の三人は凍華と雷美の体に包帯を巻きながら、烈火と冷司の戦いを見守りそれぞれが今思っている事を呟く。そして外から見ている翔も……

「全く……これじゃあどこかの、青春ドラマじゃねえか……」

「

その戦いをただ見守っていた。そしてついに二人の戦いは最終局面を迎える……

「今度は……俺が勝つ！」

「どうかな？例え結末がどうなろうと……負けるつもりは無い！」

それぞれが勝負の結末を見出したとき、二人以外の時が止まった。二人もゆっくりと必殺の構えを取り、そのまま相手に向かって突っ込んでいくが、その時の叫びは誰にも自分にも聞こえない。そして一つの大きな真紅と蒼の混ざった大きな爆発が、空に咲く花火のように起きるのであった……

「数ヶ月後、神火学園生徒会会長 蒼炎寺冷司の報告」

あの戦いの決着はお互いに意識不明となる引き分けという形で付いた。凍華と雷美の命に別状は無く、俺達二人も全身打撲、火傷で済んだ。それから数日して俺は芸術師育成委員会にとある提案を提出した。以下はその基本となる物である……

・まず今まで行ってきた武力による我々の肅正は今後、例外を除いての肅正目標の学園の生徒会との模擬戦へと変更する。

・模擬戦を行わなくても解決できる問題のある肅正目標とは生徒会同士の対話で行う。

・肅正が完了した場合は、今後は友好的な関係を築くと共に、より良い物へと発展出来るよう努力、協力等を惜しまない。

この三つを中心に、これから色々な提案がさらに提出されるであろう。この提案の管理者には勿論この俺や神火学園生徒会が選ばれ、指名として炎堂烈火と林田翔もいる。未だ問題は山積みだが、俺には大事な仲間も友も家族も居る事だし、やっていけると思う。以上を持って今回の報告を終了する。

神火学園 生徒会会長 蒼炎寺冷司

「って感じでどうだ？」

「いいですね。新しいお兄様って感じで。」

「そうか……さすがは俺の妹だ。」

「恥ずかしいです……// // //」

冷司は未だ入院中の凍華に報告書の確認をしてもらっていた。今はそのOKをもらった所であったのだが……

「あのお兄様……その私達の罪は……」

「聖龍と魔龍の力を同時に完全解放することで死んだり、喰われた

りした者達は全て復活したんだ……一応消えているとは思う。
でもやった事は忘れちゃいけない……」

「ですよ……あつ。」

いつの間にか冷司は、少し震えていた凍華を抱きしめていた。凍華もそのまま抱きしめ、二人は口づけをしその数分後に冷司が普通に離れる。

「落ち着いたか？」

「……はい。もう大丈夫ですからね、ありがとうございますお兄様。」

「おう、頑張ろうな。」

「はい！」

こうして烈火と冷司の出会いから始まった長い戦いは一応の決着を見せた……。しかし、未だ多くの謎は残り、その全ては終わって等いなかった……

戦いの終わり（後書き）

次回から闇夜さんの「黒と白の物語」とコラボします。

設定その2（前書き）

新しく出てきた四人について紹介します。

設定その2

仲間設定その2

名前 げきてつ 撃鉄銃人 がんと

身長 175 cm

体重 61 kg

好きな物や人 銃火器、ホットドック、コーラ、全世界の女の子

嫌いな物や人 規律とかに厳しい奴、女の子に優しくない奴 幻術とか気味の悪い物

趣味 銃火器の整備 銃回し、西部劇の鑑賞、デートや合コン

炎の色 黄金に近い黄色

炎術師ランク 焰（正確には爆炎と焰の間。 実力などによって繰り上げられている）

武器 お手製のマグナムリボルバー（THE・ユニコーン）etc
異名「的と女子の心を同時に射貫く一角獣」

ガンマン風に改造した黄色のブレザーとズボンに、カウボーイハットを深く被ったニヒルな笑みを浮かべている、一匹狼の雰囲気をつた少年。

しかし雰囲気とは別に、自由気ままで尚且つ部類の女の子好きという性格。 かしながら、女性の意思や心情などはしっかり把握し、変態的な事、嫌がる事は絶対にしないため、女の子達の人気は高い。それでも自分の運命の人を見つけるまでは付き合おうとはしないため、更に女の子達の人気が高くなっている（誰が彼と早く付き合うのかという裏の戦いが起きているらしい）。

戦闘は、多数の銃火器で一気に制圧するのと、二丁のお手製マグナムリボルバーを使ったアクロバティックな射撃で倒していく二つの戦法を持っており、その殆どは後者の方を選んでいる。

使われている弾丸は、彼の炎を込めた特殊な弾丸に、その炎を纏わ

せて飛ばしているため、弾道などは自在に操る事が出来る。
因みに彼の弾丸は強力な痛みで一週間〜半年に掛けて動けなくなるが、死ぬ事は絶対に無いらしい（基本男女関係なくやるが、気まぐれでそのまま生かしておく場合もある）。

炎装状態はユニコーンをモチーフとしているらしく、多数の銃火器を全身に纏い、各部にユニコーンを模した装飾がされている。（本編では未登場）

余談だが、彼の瞳を見た人物は誰一人としていない。覗こうとしてもはぐらかされてしまうため、今現在確認は不可能である。

必殺技は「スパイラルショット」、炎の螺旋を描く弾丸を高速で何発も打ち込む。

どくぬま
名前 毒沼桜

身長 170cm

体重 47kg

好きな物や人 様々な花と蝶、妹様、暗器

嫌いな物や人 規律などを乱す存在、少し高すぎる身長、普通すぎるスタイル、差別

趣味 生け花、花や蝶の観察、読書

炎の色 濃いめのピンク

炎術師ランク 焰（正確には焰）。ギリギリで焰なため、若干不安定な位置にいる）

武器 制服の袖に隠した鎖（蛇怒羅^{くたろ}）

異名「隻眼な規律の番人」

袖が他の制服よりも幾分大きいコートの様な紫色のブレザー、薄紫のロングスカートに身を包み、ピンクのリボンで紫色の髪をポニテールにして、左目に漆黒の眼帯をしている16歳の少女。

性格は真面目尚且つ厳格。特に規則や校則にはとても厳しく、それを守れたりしない人物には徹底的に処罰を与えたりする。他にも差

別をしたり、整えられた物を壊したり、乱したりする存在も厳しく罰するため、一般的に冷たいイメージがあるが、実際は物静かで、冷司が居ない時の凍華の付き添いをしたり、植物や蝶の観察、生け花、読書を愛する心優しい女の子である。

しかし、女子にしては高い身長とそれに似合わない普通なスタイル、自分とは正反対な性格の銃人にそれぞれ、コンプレックスと悩みの種を抱えており、解決できない事に不満やイライラを貯めては自分の趣味に没頭して発散させている。

炎術師ランクが不安定な位置にあるが、それを感じさせないほどに炎の制御と正確さがとても高く、それを生かして袖に仕込んだ鎖を自由自在、身体の一部のように操る。

因みに見た目からは想像できない綺麗な炎の色なため、それを言われると何が何だろうと鎖に炎を纏わせて縛り上げる。そして彼女の眼帯で隠された目には何かがあるらしいがそれは知られていない。

炎装状態はメドゥーサがモチーフで、下半身に炎で作り出した巨大な蛇が融合し、蛇の装飾がされたドレスと髪飾り、蛇その物となった鎖が特徴である。（本編では未登場）

必殺技はあるらしいが、実態は不明となっていて、その鍵は眼帯で隠された瞳にあるらしく……

名前 ねむり 眠雷美 らいみ

身長 156cm

体重 秘密だよ（by雷美）

好きな物や人 睡眠、凍華、桜、恋人の総君、友達、とうもろこし、かわいい動物

嫌いな物や人 煩い物、運動、怖い動物

趣味 大食い、睡眠、音楽鑑賞、絵描き

炎の色 薄い黄色

炎術師ランク 焰（正確には銃人と桜の間くらい）

武器 殴打系の武器の一つ、モーニングスター（イエロースター）

異名「怪力と驚きの眠り姫」

薄い黄色のブカブカとしたブレザーと膝くらいまでのスカート、黄色いセミロングで両脇に大きなリボン、頭の上にカチューシャを付けた殆どの時間を眠って過ごしてる天然系の15歳の少女。

常に眠たそう、というより殆どが眠っている状態と変わりなく、起きていたとしても、目を殆ど閉じているため、油断して気を抜いたりすると、すぐさま眠りについてしまう。

しかし何故か眠っている状態でも普通に会話（寝言のように断片的にはあるが）したり、歩き回ったりできる不思議な技を持っている。

実は見た目に寄らず、結構な大食いで、さらには想像もつかないくらいに怪力を有している。その怪力も相まって、自身の武器で重量級であるイエロースターを軽々と片手で振り回し、何でも吹き飛ばす。

しかもこのイエロースターは鎖の部分が伸縮可能である程度離れた距離の戦闘も可能で、鉄球部分のトゲを伸ばして、一気に深い傷を負わせることも可能である。（その他、鉄球部分を模した炎を発射したり、綿のような炎の壁で攻撃を防いだり、それを爆発させる事も出来る）

因みに着やせするタイプなため、ブレザーを脱ぐと整えられたスタイルが露わとなるため、その癒し系な性格も相まって、特に同性からの人気が高い。（実は遠距離恋愛中の恋人が居る）

炎装のイメージは羊で、炎装すると黄色いモコモコとした炎の大きめのコートを被り、羊の角のような装飾を至るところに身につけた姿となる。

必殺技は「クッションボム」。炎のクッションを幾つも作りだし、それを相手にくっつけてイエロースターで点火させ、一気に爆発させる。（イエロースターを使わなくてもある程度は彼女の意味で爆破できる様子）

名前 ふたぎ 二木槍 そう

身長 173 cm

体重 59 kg

好きな物や人 修行、寿司、先輩方、昆虫

嫌いな物や人 ハレンチな物や事

趣味 トレーニング、スポーツ、虫の飼育

炎の色 黄緑

炎術師ランク 焰（神火学園一年生唯一の純粋な焰）

武器 二本槍（右手に持つのが鍬形、左手に持つのが兜虫）
異名「熱血で硬い虫王」

黄緑色の髪を前の部分を上に伸ばして留め、後ろの方は二つに分けた感じの髪型をした、凄く熱い物を宿した瞳が特徴の、15歳の少年。

常に努力や修行などを怠らず、先輩や仲間達に役立つという事を優先している熱血漢な性格をしており、それでいて超が付くほどの一本気で素直でもあるため、同学年の仲間達からはとても信頼が厚い。翔程では無いが、自然や自然に住む生物が好きで、特に昆虫に興味がある。そのため、時々翔のサポートをする傍ら、珍しい昆虫を見つけようとしている。

一年生の中で唯一の焰であるため、戦闘力は冷司達に劣らないほど高い。特に槍術は群を抜いて抜群に強い。そして自身の好きな昆虫を模した独特な戦い方を組み合わせて、戦うため一般の生徒では到底適わない程に強い。（その裏では物凄い努力と勉強の毎日であった）

炎装のモチーフはクワガタとカブトムシ。炎装すれば、その両方の特徴を持った炎の装甲を身に纏い、幾千もの敵を薙ぎ払い、貫いていく。

必殺技は「はさみぎりつつかん 鋏切突貫」。両手の槍で挟み込むように斬撃を浴びせ、

弱ったところで一気に挟みながら持ち上げ、そのまま放り投げて落ちてきた所に突き刺すという技。

因みに、ハレンチな事には抵抗が全く無いため、少し見ただけで鼻血を吹き出し、気を失ってしまうという一面もある。

四人共冷司や凍華と同じ、神火学園生徒会に属しており、銃人は副会長、桜は書記、雷美は会計、槍は他の生徒会の役員を纏める役員長を勤め、銃人は帰宅部、桜は華道部、雷美は美術部、槍は槍術部に属している。

設定その2（後書き）

やられたサブキャラ、新しく出てきた武器などはその1を後で編集するので、そちらに載せたいと思います。

次回は闇夜の黒鳥さんの「黒と白の物語」とのコラボです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4720s/>

聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎

2011年11月24日18時58分発行